

---

# 反对呪文

カイリ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

反対呪文

### 【Nコード】

N4903A

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

クディッチの試合の日、男は少年にかけられた呪いを解くべく、少年を見つめていた。その脳裏に、少年の両親とある約束を交した夜のこと浮かんてくる。

(前書き)

このお話の設定としては、“賢者の石”でスネイプ教授がハリーの  
筈にかけられたシーンのスネイプ教授の心境……となっておりま  
す。やや原作と噛み合わない点もありますが、そこは軽く流して頂  
けると幸いです。御容赦ください。

反対呪文

幕にまたがって大空を飛び回る少年は、ヤツの面影をしつかり残していた。死して11年も経つのに、憎むことすら許さないあの男。その息子を助けることで、あるいはあの頃のことを思い出にできるのなら。

\*

「……………何の用だ」

月の綺麗な夜だった。まどろみかけていたセブルス・スネイプは、突然の訪問者に向けて冷たくそう言い放つ。

「やア、スニベリー。久しぶりだな。お邪魔させてもらうよ」  
「元気そうね、セブルス」

ジームズ・ポッターとリリー・エバンズ 否、リリー・ポッターはセブルスの許可も得ずに屋敷に上がり込んだ。リリーの腕の中では、赤ん坊が小さな寝息をたてている。

「……………オイ、勝手に入るな」

セブルスはこめかみを押さえて一応二人に言う。が、二人はまるつきりセブルスの言葉を無視してリビングの戸を開けた。

二人の身勝手は、まるで変わっていなかった。

「で？ 何の用だ？ 夜に赤ん坊を連れ歩くとは親の風上にも置けないな」

セブルスが二人の腰掛けたソファの向かいに腰を下ろしながら問う。茶を出してやる気など毛頭ないようだ。

「ふふつ。怒られちゃったわ、ジームズ」

「まさか君に親の心得を説かれるとは思わなかったな」

くすくすと笑う二人に、セブルスはあからさまに顔をしかめた。  
「用がないならさっさと帰れ」

「あら、用ならあるわよ、ちゃんと。あのね、あなたにお願いがあるの」

リリーが優しく微笑む。

とくん、とひとつだけ、胸の太鼓が鳴った。

「この子がハリーよ。わたしたちの息子。シリウスが名付け親なの」  
聞いている。リーマス・J・ルーピンがご丁寧にもふくろう便を送って寄越していた。

「まあ君は聞いたことがないかもしれないが、産まれた赤ん坊が強い人間に育つおまじないがあつてね。その子どもの両親が最も信用している五人の人間にキスしてもらえばいいらしい」

ジェームズがハリーの頬をつつきながら言う。セブルスはしかめっ面のままハリーを見た。

「シリウス、リーマス、ピーター、ダンブルドアにはもうしてもらった。最後の一人を、お前に頼みたい」

ジェームズが躊躇う様子もなく言う。側ではににことリリーがセブルスを見ていた。

「私に頼む内容ではないだろう、それは。根本的に私を選ぶのはお門違いだろう」

セブルスは嘲笑を浮かべて言う。リリーがきよとんとした。

「どうして？」

「どうして、ではないだろう。私が貴様らを裏切らない確証がどこにある？」

それに私は、死喰い人だったしな。セブルスは自嘲の色を濃くして口の中だけで呟く。このことは、ジェームズも承知しているはずだ。

「…………どこにもないな」

ジェームズも嘲笑する。リリーが眉根を絞った。

「ジェームズ！！」

リリーに笑顔を見せ、ジェームズは再びセブルスに向き直る。

「だが、お前が俺たちを裏切る理由もないだろ」

「……………」

セブルスは毒気を抜かれた。

私がいづらを裏切る理由がないだって？ 馬鹿か、

こいつ。ホグワーツで何をしたのか忘れていいのか、この男は？

でも、と思い直す。ジエームズには大きな力がある。ジエームズたちを裏切る理由は十二分にあるが、この頼み事を断れる理由はなかった。

セブルスが思案を巡らせていると、目の前の男はまた口を開く。

「ああ、言っておくが、別にハリーを愛してくれなくてもいいぜ」

「……………は？」

父親のものとは思えない台詞に、セブルスは思わず聞き返した。「むしろ、憎んでほしい。お前の持つ全ての憎しみをハリーに向けてほしい」

「……………言っている意味が分からん」

「そのままの意味さ。殺してやりたいほど憎め。……………その代わりに、ハリーを守ってほしい」

「言っていることが矛盾しているが？」

セブルスはジエームズの言いたいことを図りかねている様子だ。ジエームズは、もどかしそうに溜め息をついた。

「だから、この世でハリーを殺すのはお前だけだ。お前がハリーをこの世で最も憎む人間になってほしい」

それを聞いて、セブルスは顔をしかめた。……………つまり、ハリーを他の人間に殺されないようにしようと、そういうことを言っているのだと気付いて。

「……………頼まれてくれるよな？」

一分の隙もない笑顔。

……………この男はずるい。自分が私に憎まれていると知り、ハリーを憎めと言ったら喜んで憎むと踏んでいる。そのくせ、私がハリーを殺すはずがないことを知っている。

全て見透かされているという訳だ。

悔しいが、頷くことしかできない。それは全て、否定しようがない事実だから。

「ありがとう、セブルス」

リリーが嬉しそうに微笑んだ。思わず目をそらす。

そんな顔で笑うな。

胸中で呟きながら赤ん坊を受け取る。優しい匂いがした。驚くほど軽い。

額に口付けると、ハリーは僅かに動いた。小さな手がセブルスの長い黒髪を掴む。

「……………おい、放せ」

しかしハリーは、しっかりと髪を掴んだまま寝入ってしまった。いる。

「いいぞハリー！ そのまま引き抜いちまえ！ 少しは爽やかになるぜ」

「ポッター！ ふざけるなよ！！ エバンズ、母親ならなんとかしろ！！」

セブルスがすっかり困惑してリリーを見ると、彼女はピタリとジエームズに寄り添って彼を見ていた。

「ハリーったら、すっかりあなたを気に入ったみたい」

「……………っおいつっ」

激しい突っ込みをいれたセブルスから、リリーはハリーを受け取る。

「そろそろ、おいとましようかしら。ねえ、ジエームズ？」

「ああ。迷惑にもなるしね」

「……………既にもう十分迷惑なことに気付け」

セブルスは立ち上がるジエームズを冷ややかに睨んだ。

「そういえば、俺たち、明日引越すから」

「……………明日？」

「ちよっとヤバくなりそうなんだな。守人はシリウスに頼んだ」

ジエームズがけるっつと笑った。危機感なんて、微塵も感じてい

ないのではないかと思うほどに。

「そういえば、教師になるそうね」

玄関でリリーは振り返った。

「まだ分らん」

「もしセブルスがホグワーツの教授になったら、この子を教える日も来るのかも」

「優しくしてくれよな」

ジェームズがセブルスの肩に手をのせる。

言われなくとも。愛しい友。愛しいヒト。その二人

の愛しい息子を、愛しこそすれ憎む理由などない。たとえ憎めと頼まれていても、心の底から憎むことなんて。

「じゃあな、セブルス。頑張れよ」

「……………死ぬなよ」 セブルスの言葉に、二人は極上の笑顔を返した。それは、了解、だったはずだ。

\*

ジェームズとリリーが死んだ、と。その事実は酷く重くのしかかってきた。

「……………なぜ」

交したはずではなかったか。最初で最後の約束を。

「……………なぜ、こんなことが……………！！」

守人のはずのシリウス・ブラックが裏切り、二人の居場所を“名前を言ってはいけないあの人”に伝えたのだという。

ジェームズが唯一特別扱いしていた男だったのに。ハリーの名付け親だったのに。全てを持っていたのに。

「なぜ、裏切った……………！ ブラック……………っ！！」

許さない、あの男を。そして、“闇の帝王” かつての主君、ヴォルデモート卿を。

\*

ハリー。お前は、似すぎている。ポッターとも、エバンズとも、ブラックとさえも。なぜ私を苦しめる？ 愛すことも、嫌うことも、心から憎むこともできず 言葉や態度ばかりが妙に空回りするのだ。

なあ、ポッター。これで終りにするぞ。私はお前の愛しい息子を守る。それでお前との約束は果たされる。必ずや死なせはせん。だから、……………。

息を詰め、少年をじっと見つめた。

父親譲りの容姿、母親譲りの瞳。

失わせない。もうあの二人を。

男は静かに“闇の魔術”に対抗する反対呪文を唱え始めた。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。このお話の内容・設定について補足を何点か……。まずセブルスとジェームズの仲が良すぎるといいますが、そこはジェームズも父親となり、二人とも大人になったので、そんなに険悪ではなかったと思うのです。またセブルスにとって学生時代のことは、根に持っていたのでしょうか、そんなに悪くはない学生時代だったのでは？とセブルスは感じていたといいことにしておいてください(汗)。未熟で申し訳ありません。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4903a/>

---

反对呪文

2008年11月7日08時11分発行